

安田初雄「高田市の景観」にみる雁木造りと積雪との関係の 疑義とその検証について —雁木通りの形成要因の再検討—

菅 原 邦 生

Questions About the Relationship Between the Formation of Gangi Zukuri
and Snowfall as Seen in Hatsuo Yasuda's "Landscape of Takada City"
and its Investigation
—Reexamination of the Factors That Formed Gangi Dōri—

Kunio Sugahara

1. はじめに

かつて日本海側を中心に広く分布し、雪国の代表的な都市景観として知られる雁木通りは、雁木を設けた町家が町並みに連続することで形成されたものである。ガンギ（「雁木」）は、我が国の新潟県とその周辺地域において主屋から道路側に下ろした庇の呼称を指し、同様の庇は他県にも見られ、青森・岩手・秋田の各県ではコミセ（「小店」、「小見世」）、鳥取県若桜町ではカリヤ（「仮屋」）と呼ばれている。さらに近世文書にも「雁木」（長岡、高田ほか）、「小見世」（弘前・久保田ほか）、「小間屋」（米沢）などの呼称が確認でき、地域的な呼称の違いは近世にまで遡る¹⁾。このように主屋から道路側に下した庇は地域によって呼称が異なるものの、いずれも歩行者用の通路として利用されることから、本研究では個々の町家の前に設けられた往来可能な庇が連続し、町並みにおいてアーケード状の連続空間をもつものを「雁木通り」と定義する。

本論において、雁木通りと積雪との関係を検討するのは、近世初期の江戸において雁木通り同様、往来可能な町家前面の庇下空間の存在が明らかにされ²⁾、雁木と同型の庇をもつ民家遺構が各地に確認されることから（長野県佐久市・真山家、群馬県沼田市・旧生方家など）、積雪（深雪）は雁木通り形成の十分条件と認められないことによる。

本論では、地理学者・安田初雄が現地調査などを基に、城下町高田（上越市）の武家住宅や町家の概要、さらに「雁木造り」について報告した「高田市の景観」（地理学評論 第15巻 第7号, 1939）³⁾を取り上げ、そこに記載された新潟県全域の「雁木造り」の分布に関する解説に着目して、その内容を検証する。さらに雁木通りの形成と積雪との関係を再検討するため、雁木通りの歴史的経緯や呼称別の地域分布に着目して分析する。尚、安田の言う「雁木造り」とは、雁木通りを示すことが氏家によって本人に確認さ

れている⁴⁾。

本論において、呼称の違いが具体的内容と対応する場合は「雁木」「庇」などと表記する。

2. 既往研究

既往研究において、雁木通りの形成と積雪との関係についての言及は少なく、「高田市の景観」以前においては、今和次郎『日本の民家』⁵⁾においても雁木を有する高田の町家の現状を実見したに留まり、積雪との関係については触れられていない。また『越後高田の雁木』⁶⁾においても、数棟の雁木の実測調査を基に雁木の発達過程が明らかにされるものの、防雪を前提として議論が進められている。

氏家は『雁木通りの地理学的研究』⁷⁾において、高田を含む、1960年代の調査時における全国的な雁木通りの残存分布図を示し、高田の17.9kmなど、関係市街地の最盛期における雁木通りの連続区間の距離を示した。

『雁木通りの地理学的研究』は、1998年に古今書院から刊行された、氏家の雁木通り研究の集大成であり、500頁を超える大著である。雁木通り関係市街地の地誌説明に多くの頁が割かれる一方、雁木通りの分布や形成要因に関する部分については、調査資料の追加は認められるものの、基本的には氏家の学位請求論文『日本における雁木通りの地理学的研究』（私家版、1976）と重なる部分が多く、雁木通りの形成要因については、主に以下の2点を指摘している。

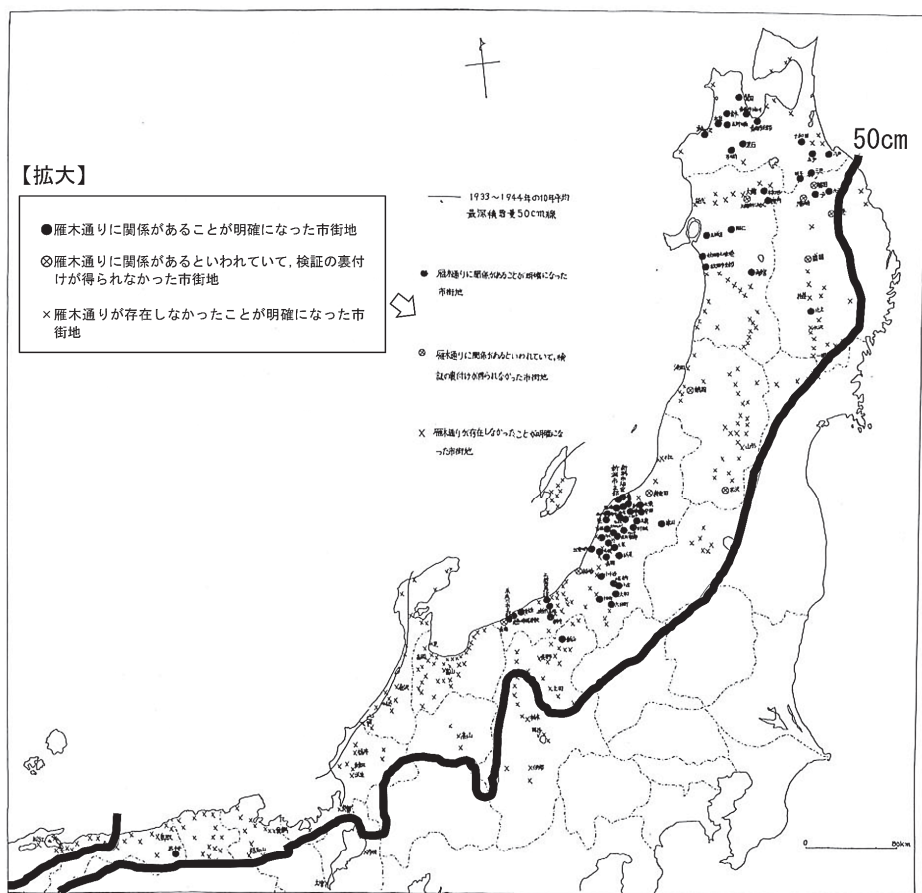


図1 氏家原図

（氏家武：日本における雁木通りの地理学的研究，私家版，1976より転載 ※太線は50cmのライン）

※ゴシック体は筆者加筆

- ①雁木通りは最深積雪量50cm以上の地域に分布している（図1）。
- ②雁木通りは城下町・宿場町・市場町など政治・経済の中心地に建設される。

しかし、安田が疑義を示した雁木通りの形成と積雪との関係についての積極的な議論は少なく、最深積雪量50cm以上の地域にも関わらず雁木通りが形成されていない町場もあることから、前述②の社会的条件を追加している。さらに各町場の機能として、宿場と市場の機能が重要である点を指摘しているものの、十分な検討には至っていない。また積雪量との関係では、根雪期間との関係も検討しているが、相関性は認められないとしている。

3. 研究の方法

本論において「高田市の景観」を取り上げるのは、安田が現地調査を基に、当時の高田市の雁木通りの状況を克明に伝えるだけでなく、新潟県内全域の町場を踏査し、雁木通りの分布を確認する中で、積雪との関係に疑義を示しているためである。安田は地理学者として福島大学で教鞭をとり、徹底した現地踏査で知られている。

雁木通りは日本海側を中心に広く分布することから、安田が指摘する雁木通りの形成と積雪との関係に関する疑義は、新潟県だけでなく、全国的な視野で検討する必要がある。その最も有効な方法は雁木通りの歴史的経緯について明らかにすることであり、雁木通りが建設された代表的な城下町を事例に全国的な視野から、その建設整備過程を検討し、さらに呼称別の地域特性について分析することにある。以上を踏まえ、雁木通りの形成を分類し、雁木通りの形成と積雪との関係は、常に認められる訳ではないことを明らかにする。

具体的な内容は、以下の通りである。

- ・「高田市の景観」にみる雁木造りの形成と積雪との関係の疑義（4.）
- ・雁木通りの歴史的経緯について（5.）
- ・呼称別にみる雁木通りの地域分布（6.）
- ・雁木通り形成の類型（7.）

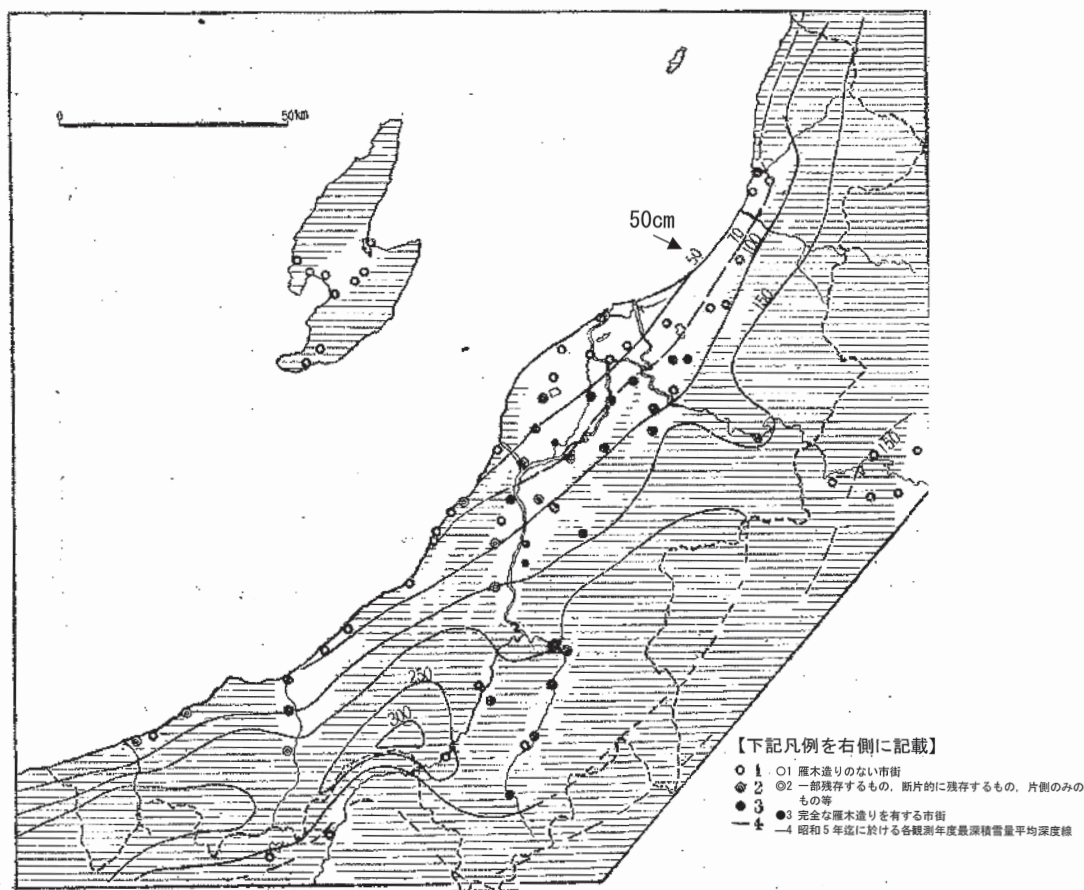
4. 「高田市の景観」にみる雁木造りの形成と積雪との関係の疑義

「雁木造り」（雁木通り）と積雪との関係について、同論文に、以下の通り記される。

北越に於ける雁木造りを有する集落の分布を見ると、上越の商店街は何れも夫れに属し、中下越でも東の山麓及び夫れ以東の山間の諸都市例へば水原、村松、長岡、十日町等は皆雁木造りが町の一部或いは大部分に分布し、累年極大積雪量平均50糎を超える都市の特色となっている。夫より少ない場所でも雁木を有する集落もあるが漸次雁木を取り拂はれて改築されているのもあり、要すれば無くとも左程不便を感じぬ町もあろう。新潟も大火災前迄は雁木があったが現在は作られてなく、雁木造りの無い寺泊、柏崎等と共に積雪の少ない地方に属する。弥彦山脈の外側で断続的な雁木の存する街は出雲崎であるが内側では西吉田等に立派な雁木が存して一見説明に困る如くである。冬季卓越風に対し横列をなす丘陵の内側に相当するので、巻町以外観測所が無くて不明瞭であるが、此の地帯は幾分か積雪が多いものと考えべきか。50糎線を越えても雁木を持たぬ町もあるし、水原

よりも積雪が多いと称せられる新発田に雁木がなく却って水原にある等必ずしも積雪との関係を直接示すとは謂ひない。弥彦山脈の東陰を北に去れば下越の雁木の無い町の分布区になる等から考えて、上、中越の雁木造りを有する都市の分布は或る習慣として説くべきか。是等の点を考慮に置いて、高田市の雁木造りが深雪地の特異な景観の一つである事は確実である。

安田が指摘するように、上越地域においては、最深積雪量50cm以上の諸都市における雁木通りの分布が明瞭なものの、中・下越では、雁木通りの形成と積雪との関係が成り立たないケースを指摘している。この点について安田は、日本海に面した寺泊・柏崎同様、積雪量の少ない新潟においても、明治末期に度重なった大火以前において、雁木通りが存在した点を指摘し、さらに弥彦山脈の内側と外側に点在する町場や、新発田（現在の発田市）と水原（現在の阿賀野市）について特に紙面を割いて説明している。弥彦山脈の内側（海側）と外側（内陸側）では、積雪量に違いがあるものの、外側の出雲崎では現在も妻入町家の建ち並ぶ町場として広く知られるものの、雁木通りは形成されず、弥彦山脈の内側に位置する旧吉田町（現在の燕市）は現在も雁木通りが現存している。



第5圖 新潟縣の雁木造を有する市街の分布と積雪量

1: 雁木造りのない市街。2: 一部残存するもの、断片的に存在するもの、片側のみのも等。3: 完全な雁木造りを有する市街。4: 昭和5年に於ける各観測年度最深積雪量平均深度線。
(註) 帝國國中、市街として赤色に着色する聚落を選び雁木の有無を調査せり。

図2 新潟県内の雁木通りの分布（「高田市の景観」1939より）

※ゴシック体は筆者追加

また県北の城下町新発田は、『越後土産 初編』にみる定期市の様子を描いた挿絵から、雁木通りの形成が指摘されている⁸⁾。しかし詳しく見ると、町家前面の庇の連なりが確認できるものの、通路機能

までは確認できない。氏家は大正期の古写真に幅広の庇が連なる様子から、雁木通りが形成されたと指摘しているが⁹⁾、通路としての利用が明確に確認できている訳ではなく、あくまで推測である。一方、水原は、新発田と地理的に近いものの、雁木通りの形成が確認され、安田によれば、積雪量は新発田より少ないとされる。

5. 雁木通りの歴史的経緯について

5.1. 城下町と雁木通りの建設整備過程の類型

ここでは雁木通りの形成と積雪との関係を再検討する一環として、雁木通りが建設された代表的な城下町を事例に、城下町と雁木通りの建設・整備過程を表1に示す。

これによると、雁木通りの建設整備過程は、16世紀末から17世紀初頭の城下町建設期に、城下町建設の一環として、藩命により政策的に建設された場合（藩主導型）と、城下町建設に遅れて18世紀に建設された場合に分けられる。さらに城下町建設に遅れて建設された場合には、①町人が藩に建設を願い出るなど町人主導で建設された場合（町人主導型）と、②長期にわたり自然発生的に形成された場合（自然発生型）がある。

表1 近世における雁木通りの建設整備過程
(菅原邦生：雁木通りの形成と衰退に関する研究，日本工業大学研究報告別冊 99-01，1999より)

| 時代区分 | | | | 16C末 17C | 18C | 19C | | | |
|-----------|-------|---------|---------------------|---|------|------|------|------|------|
| 類型と城下町名 | | | | 1600 | 1650 | 1700 | 1750 | 1800 | 1850 |
| 建設時期 | 建設主体 | 成立過程 | 城下町名 | | | | | | |
| 城下町建設と同時期 | 藩主導型 | 通路機能目的型 | 若 桜 | ・町の建設整備(天正9年 1581～慶長5年 1600) ¹⁾ ・城下町建設時に、政策的に雁木通りを建設した ²⁾ 。 | | | | | |
| | | | 長 岡 (表町) (裏町) | ・町建設(元和3年 1617～元和8年 1622) ³⁾ ・城下町建設時に、表町に雁木通りを政策的に建設した ⁴⁾ 。(元文4年 1739) ・表町に町人主導で雁木通りが建設された ⁵⁾ 。 | | | | | |
| 城下町建設に遅れる | 町人主導型 | 通路機能目的型 | 高 田 | ・町建設(慶長19年 1614) ⁶⁾ ・城下町建設後、町人主導で雁木通りが建設された(正徳年間(1711～1715)) ⁷⁾ 。 | | | | | |
| | | | 八 戸 | ・町建設(寛永7年 1630) ⁸⁾ ・すでに存在した雁木が元禄年間(1688～1703)に町並みに連続することによって形成された ⁹⁾ 。 | | | | | |
| | 自然発生型 | 通路機能付随型 | 弘 前 | ・町建設(慶長16年 1611) ¹⁰⁾ ・雁木のみ存在 ¹¹⁾ ・雁木が連続 ¹²⁾ 、雁木通りの通路機能を確認 ¹³⁾ (天和2年 1682) (享保年間 宝暦2年 1752) 1716～1735) | | | | | |
| | | | 糸 魚 川 | ・築城(慶長9年 1604) ¹⁴⁾ 町の建設は寛文年間(1661～1672)以前 ¹⁵⁾ ・雁木を確認 ¹⁶⁾ 雁木を設けた商家が町並みに連続することで雁木通りの建設が開始された(18世紀中頃) ¹⁷⁾ (元文元年 1736) | | | | | |

凡 例

■ 城下町建設期

■ 城下町建設期と同時期に藩主導で雁木通りが建設された(藩主導型)

■ 城下町建設期に遅れて町人主導で雁木通りが建設された(町人主導型)

■ 城下町建設期に遅れて自然発生的に形成された(自然発生型)

破線は、雁木のみ存在。

注番号は、根拠となる資料を示す。注1) 鳥取県編『鳥取県史 第3巻 近世 政治』(鳥取県、1979年)。2) 木内儀蔵ほか編『集藩地理講座 第4巻』(朝倉書店、1959年)。3) 長岡市編『長岡市史 通史編 上巻』(長岡市、1995年)。4) 『八町家の記録』(『長岡市史』長岡市役所、1931年 所収)。5) 『元文四年九月 月番覧書』(『市史双書 NO.19 長岡藩政史料集(3)長岡町奉行月番日記』長岡市、1991年 所収)。6) 高田市史編集委員会編『高田市史 第一巻』(高田市役所、1958年)。7) 『正徳年間 高田町各町記録』新潟県上越市立高田図書館蔵。8) 八戸市史編さん委員会編『八戸市史 通史編』(八戸市、1976年)。9) 前田利見『八戸藩史料 全』八戸郷友会、1929年。高島成信・三浦忠司『南部八戸の城下町』伊吉書院、1983年。9) 『雑書』(『八戸市史 史料編 近世2』八戸市、1970年 所収)。10) 『津輕歴代記頭 巻之一』(『みちのく双書 第七集 津輕歴代記頭 上巻』青森県文化財保護協会、1959年 所収)。11) 『御新検御年奉行方覚書』(『青森県史(二)』歴史図書社、1971年 所収)。12) 弘前市史編集委員会編『弘前市史 藩政編』(弘前市、1963年)。13) 『要記秘鑑 廿三 上 町年寄之部』(『津輕近世史料 弘前城下史料 上』北方新社、1986年 所収)。14) (15) 糸魚川市役所編『糸魚川市史2』(糸魚川市役所、1977年)。16) 『町年寄御用留帳』小林家蔵、糸魚川市役所編『糸魚川市史4』(糸魚川市役所、1979年)。17) 糸魚川市役所編『糸魚川市史4』(糸魚川市役所、1979年)。

①藩主導型

例えば長岡（新潟県長岡市）は、堀直奇により元和3年（1617）に築城が開始されたが、その後移封され、翌4年（1618）に入府した牧野忠成は城を完成させ、元和8年（1622）に町割りを定めた¹⁰⁾。長岡（表町）の雁木通りについては、寛永19年（1642）8月『八町家の記録』によれば、元和3年（1617）から元和

8年(1622)の城下町建設の一環として、通路機能の確保を目的に、藩命により政策的に建設された¹¹⁾。

若桜(鳥取県若桜町)は、天正9年(1581)に木下重賢が入封し、城下町の骨格が形成された。その後慶長5年(1600)には山崎家盛が入府して町が整備され、後に若桜街道沿いの宿場町として繁栄した¹²⁾。若桜の雁木通りについては、「若狭出身と伝えられる旧城主により、城下町建設の場合移入された」と指摘され¹³⁾、城下町建設と同時期に、藩命により雁木通りが建設されたものと考えられる。

以上、16世紀末から17世紀初頭の城下町建設期においては、藩が、城下町建設の一環として、政策的に雁木通りを建設した。

②町人主導型

例えば長岡の裏町は、『元文四末年九月 月番覚書』元文4年(1739)9月条によれば、町役人の小林万左衛門の請願により、冬期だけの仮設形式の雁木通りが町人主導で建設された¹⁴⁾。

高田(新潟県上越市高田)は、慶長19年(1614)に松平忠輝が高田城を築城し¹⁵⁾、城下の建設が開始された。高田の雁木通りに関する史料上の初見は、『正徳年間 高田町各町記録』¹⁶⁾の下紺屋町の部分に記載された、「是(欠)小路道路御留被成候(欠)通りハかんき付置申候」である。同記録は、名主から藩へ報告する形で記載され、藩命によって行われたことについては、その旨の記載が見られることから、町人主導で雁木が建設された可能性が高い。さらに寛保3年(1743)の記録によれば、雁木通りは、当初の都市設計に含まれず、城下町建設後、通路機能の確保を目的として建設された¹⁷⁾。よって『正徳年間 高田町各町記録』にみる雁木の建設は、雁木通り建設の一環であった。

以上のように高田の雁木通りは、城下町建設後、正徳年間(1711～1715)までに、町人主導で建設されたものと考えられる。

③自然発生型

例えば八戸(青森県八戸市)は、南部利直が旧根城城下の北側に新たに縄張りし、寛永7年(1630)に城下町が完成した¹⁸⁾。八戸の雁木通りは、元禄13年(1700)12月の記録によれば、城下の「八日之市」における雁木通りの存在が知られている¹⁹⁾。「八日之市」は表町に位置する八日町で開かれ、記録には「小見世、店、所々あるき」とある。「店」すなわち八日町の常設店舗は元禄年間(1688～1703)において町並みを形成し²⁰⁾、雁木通りは、常設店舗の前に設けられていた。よって八戸の雁木通りは、元禄年間(1688～1703)に、常設店舗の町並みが成立することで雁木が連続し、自然発生的に形成されたものと考えられる。

弘前(青森県弘前市)は、慶長16年(1611)に津軽信枚が弘前城を築き、城下町が建設された²¹⁾。弘前の雁木については、天和2年(1682)『御新検御竿奉行動方覚書』に、すでにその存在を確認できる²²⁾。さらに『弘前市史』によれば、日市が開かれた享保年間(1716～1735)頃に雁木が連続したとする²³⁾。その後、『要記秘鑑』宝暦2年(1752)7月条によれば、雁木通りの通路機能を確認できる²⁴⁾。よって弘前の雁木通りは、18世紀中頃までに、すでに存在した個別の雁木が町並みに連続し、自然発生的に形成されたものと考えられる。

糸魚川(新潟県糸魚川市)は、慶長9年(1604)に堀清重が清崎城を築いた²⁵⁾。城下の町割は、寛文年間(1661～1672)以前である。糸魚川の雁木通りは、元文元年(1736)に大町を襲った津波の被害記録に、「ひさし」を確認できる。さらに『糸魚川市史』によれば、雁木を有した茅葺きの商売屋が軒を連ねることにより雁木が連続したとする。糸魚川の商家は、18世紀中頃に建ち始め、当時はいまだ茅葺きであった²⁶⁾。よって糸魚川の雁木通りは、18世紀中頃において、雁木を設けた商家が町並みに連続

し、自然発生的に形成されたものと考えられる。

以上を踏まえ、雁木通りの通路機能の成立過程をみると、計画的に雁木通りを建設した藩主導型と町人主導型では、当初から防雪通路の確保を目的とし（通路機能目的型）、自然発生型では、すでに存在した個別の雁木が、定期市利用を背景に、町並みにおいて連続した結果、通路が成立した（通路機能付随型）。つまり、雁木通りの形成と積雪との関係は常に認められる訳ではなく、商業機能が重要な役割を果たしていた。

5.2. 各類型の発生要因

藩主導型や町人主導型は、防雪を目的として建設されたものであり、城下町建設期において交通機能の維持が最も求められたためと考えられる。長岡・高田・若桜は内陸部の城下町で積雪も多く、越後と江戸を結ぶ佐渡三道である三国街道（長岡）や北国街道（高田）、鳥取と姫路を結ぶ若桜街道（若桜）沿いであるなど、交通の要衝であった。例えば高田は、外様の雄藩、加賀前田家の戦略上の抑えとして親藩の格式をもって大名普請で建設され、加賀藩の参勤路や佐渡の金を江戸に運ぶ北国街道沿いの城下町として繁栄し、また積雪期の参勤交代では、通常は三国街道を通る長岡藩、会津街道を通る村上藩や新発田藩も北国街道に迂回するなど、厳冬期でも通行を止めることなく継立てが行われていた²⁷⁾。自然発生型は、定期市などの開催が活発になると、既に存在した雁木が連続し、自然発生的に雁木通りが形成されたものと考えられる。定期市の開催場所となるなど、商業利用が前提としてあったためであろう²⁸⁾。例えば八戸の表町では、藩政初期から中期にかけて、三日、八日、十三日、十八日、廿八日に六斎市が開催され、各市日に対応した町名を有する町で構成されていた。

6. 呼称別にみる雁木通りの地域分布とその特質

6.1. 各地の呼称

雁木は、地域によって様々な呼称がある。近世文書を見ると、「雁木（長岡、高田、糸魚川、栃尾、小千谷、片貝）、がんぎ（与板・松代）、かんき（長岡）、かんぎ（片貝）、小見世（弘前・黒石・青森・八戸）、小店（弘前・秋田）、小ミセ（弘前）、小見せ（青森・八戸・秋田）、小間屋（米沢）、こまや（白岩）、小前（山形）、庇（秋田・酒田・三条）、平板作り（津川）、ひさし（田名部・新潟・亀田・糸魚川）、見世下（盛岡）、軒下（新潟）」等である²⁹⁾（図3）。なお仮屋は、近世文書に確認できていない。現在の県域と対照すると、概ね青森県・秋田県が「小見世」、山形県の置賜地方と村山地方が「小間屋」、新潟県が「雁木」・「庇」に分かれ、鈴木牧之『北越雪譜』³⁰⁾の「江戸の町にいふ店下（タナシタ）を越後に雁木又は庇といふ」との記述に合致する。具体的には、上越地域と中越地域の一部が「雁木」、中越地域の一部と下越地域が「庇」であり、新潟県内では、地域によって呼称が異なっていた。

以上のように町家前面の庇は、地域によって呼称が異なることから、同様の要因（防雪）によってのみ、雁木通りが形成されたとは考え難い。

6.2. 呼称別にみる雁木通りの地域分布とその特質

近世における雁木通りの建設が確認された町場の分布と、代表的な町場の建設整備期を図4～7に示す。

①「雁木」

17世紀初頭の城下町建設期において防雪を目的に建設され、北陸道や佐渡三道の一部（北国街道、三

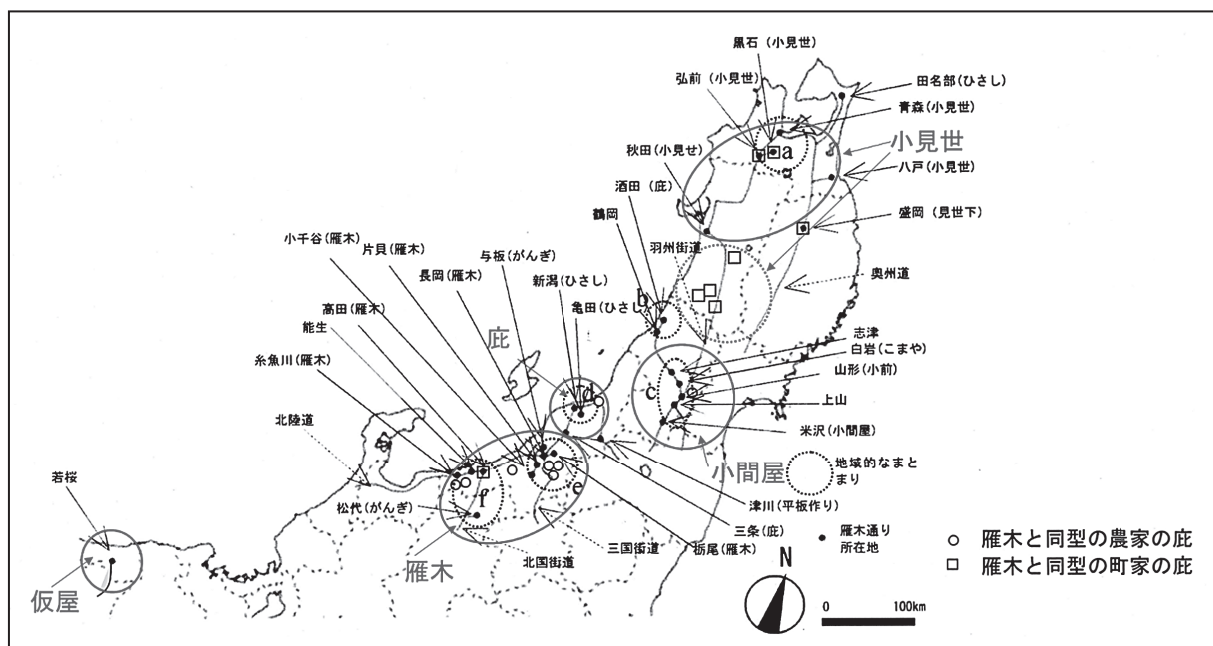


図3 近世における雁木通りの建設が確認された町場と代表的な呼称

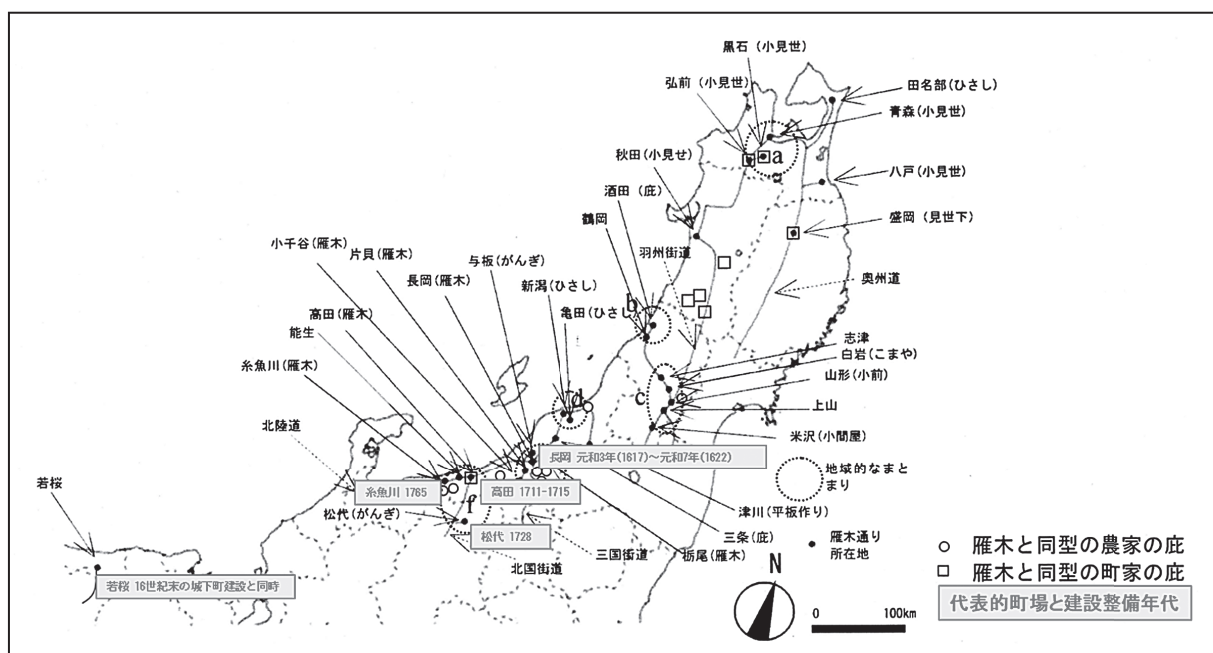


図4 呼称別にみる雁木通りの建設整備期（「雁木通り」）

国街道）沿いを中心とした城下町（長岡・与板・高田・糸魚川・松代）や宿場町（小千谷・片貝・能生）などに建設される。

②「仮屋」

鳥取と姫路を結ぶ若桜街道（因幡街道）沿いの城下町若桜（後に宿場町）に建設される。

③「小見世」

17世紀末以降、定期市が開かれるなど、城下町（弘前・黒石・八戸・秋田）の商業機能を中心とした場所に建設される。

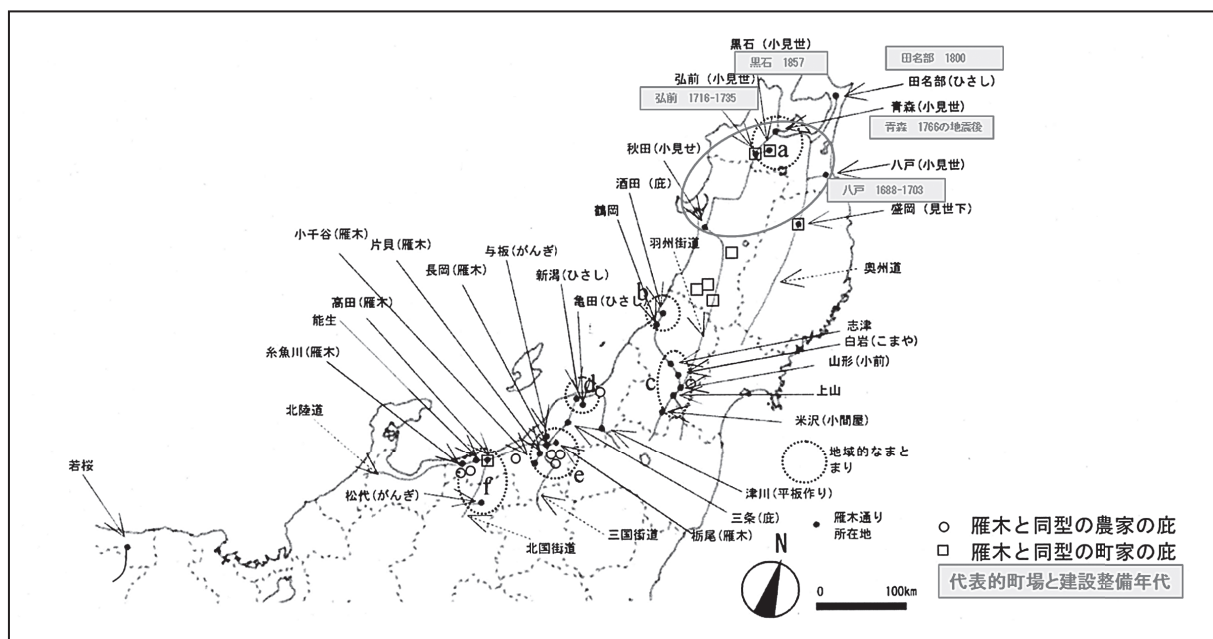


図5 呼称別にみる雁木通りの建設整備期（「小見世通り」）

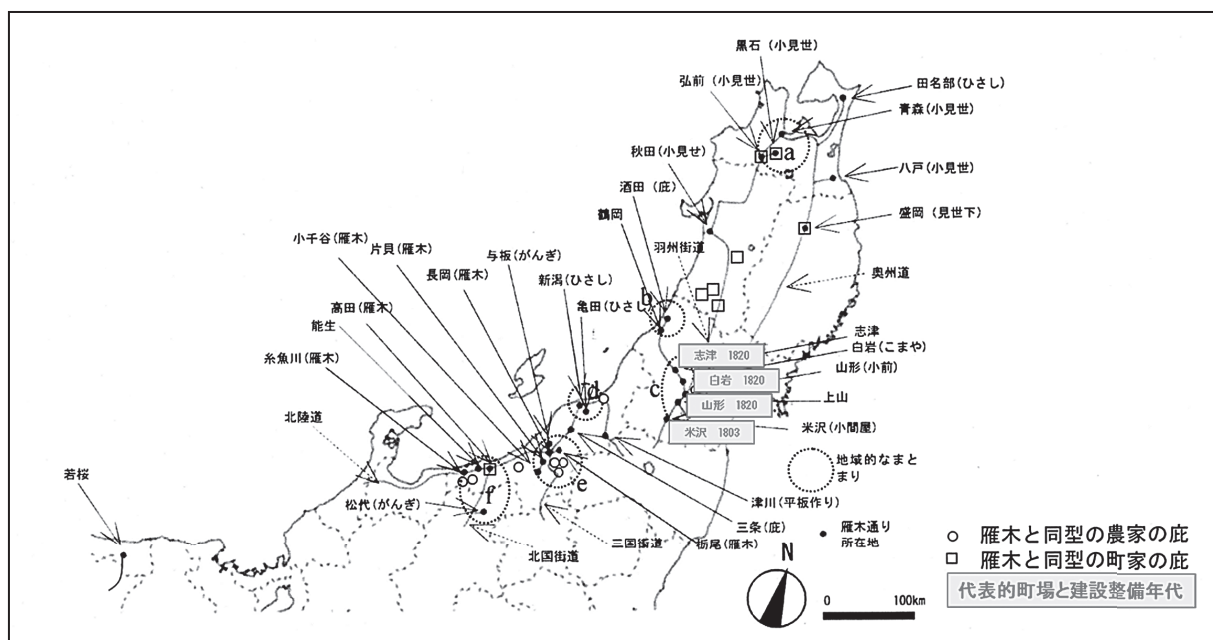


図6 呼称別にみる雁木通りの建設整備期（「小間屋通り」）

④「小間屋」

19世紀以降、出羽三山の参詣路としても知られる六十里越街道沿いを中心とした城下町（山形・米沢・板谷街道）や宿場町（白岩・志津）に建設整備が確認される。

⑤ 「庇」

信濃川流域に沿って定期市が多数開かれ、街道によっても結ばれた町場（新潟・亀田・三条）で雁木通りが建設される（新潟県中越地域の一部と下越を中心とした地域）。

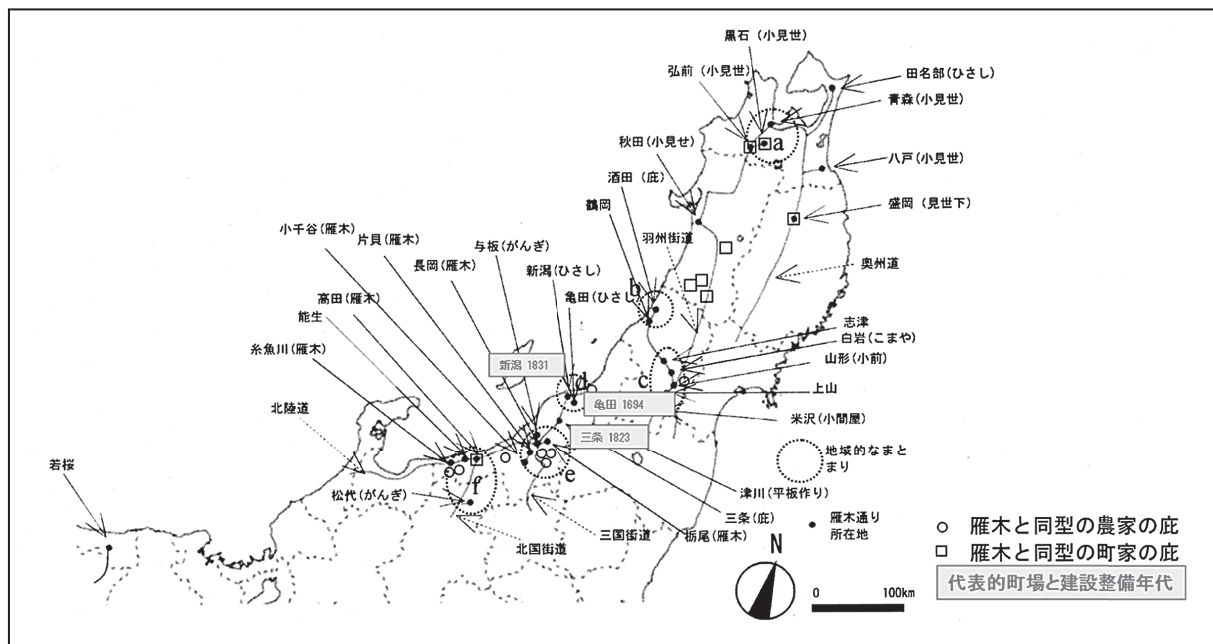


図7 呼称別にみる雁木通りの建設整備期（「庇」）

6.3. 「庇」と呼ばれる地域における雁木通りの形成

亀田・三条・新潟は、いずれも定期市が活発に開かれるとともに、信濃川流域の河岸機能を有する代表的な町場であった。史料上最も早く確認できるのは、元禄7年（1694）の亀田である。亀田は、定期市が開かれ、栗ノ木川により新潟と舟運で直結していた。『亀田町史』によれば元禄6年（1693）の町割初期に雁木通りの形成が指摘され、翌7年（1694）の記録に「ひさし」が確認できる³¹⁾。三条は文政11年（1823）の地震後に雁木通りが整備され³²⁾、新潟は天和2年（1831）に確認できる³³⁾。

近世において確認できる町場数が少ないため、断定はできないが、最盛期とされる明治末期から大正初期における雁木通りは³⁴⁾、信濃川流域沿いの定期市が開かれた町場に多数確認できることから（図9）、亀田など定期市が開かれた町場で発生した「庇」は、その後、三条や新潟など信濃川流域に沿った町場に建設された可能性が考えられる。そのため三条では防雪通路としてだけでなく、商業活動をも目的として形成された³⁵⁾。また三条に隣接する一ノ木戸村や田嶋村を含め「庇」は、商品売買に利用されていた³⁶⁾。この点については、大場も三条を例に、同様の指摘をしている³⁷⁾。

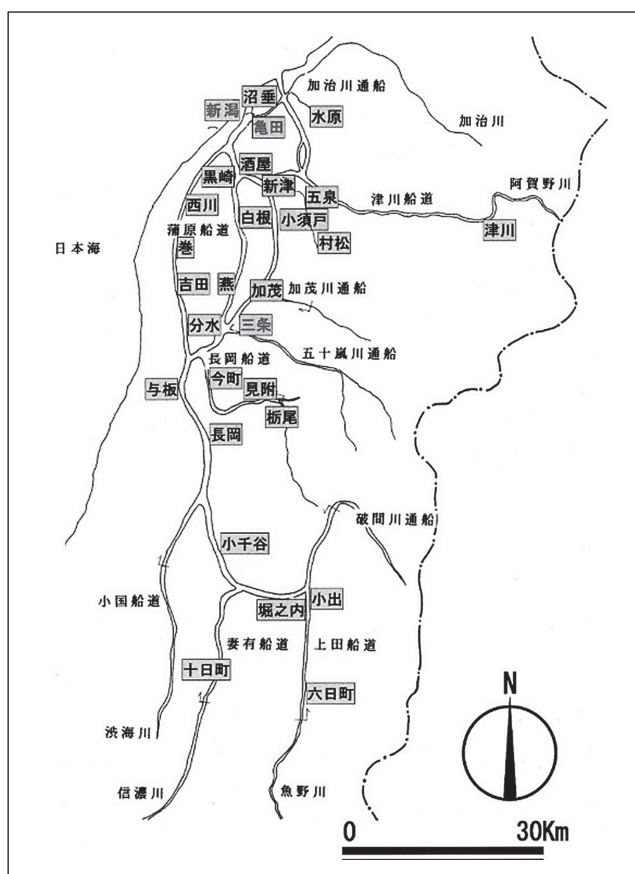


図9 信濃川流域における雁木通りの形成が確認された町場

以上のことから、「庇」と呼ばれる地域では、定期市利用を背景として形成され、信濃川流域に沿った町場に建設された可能性がある。そのため新発田や村上など県北の城下町では定期市が開かれたにも関わらず雁木通りの形成が確認できず、また安田が指摘するように「弥彦山脈の東陰を北に去れば下越の雁木の無い町の分布区になる」が存在するのも、同地域に定期市の開催が確認できないことと関係していると考えられる³⁸⁾。

尚、阿賀野川沿いの津川では「平板作り」と呼ばれ、津川は新潟や亀田などとは地理的にも離れており、異なる呼称地域と考えられる。

7. 雁木通り形成の類型

7.1. 3つの類型

氏家も指摘する宿場と市場の機能に着目して雁木通りの形成を整理すると図6となる。**宿型**（「雁木」・「小間屋」・「仮屋」）は主要街道に沿って形成され、**市型**（「小見世」）は街道もさることながら、地域の定期市が開かれる町場を中心に形成された。**宿市型**（「庇」）は、定期市が開かれた町場を街道が結び、信濃川舟運によっても結ばれた地域である。そのため、雁木通りの形成と積雪との関係は常に認められる訳ではなく、商業機能（定期市）が重要な役割を果たしていた。

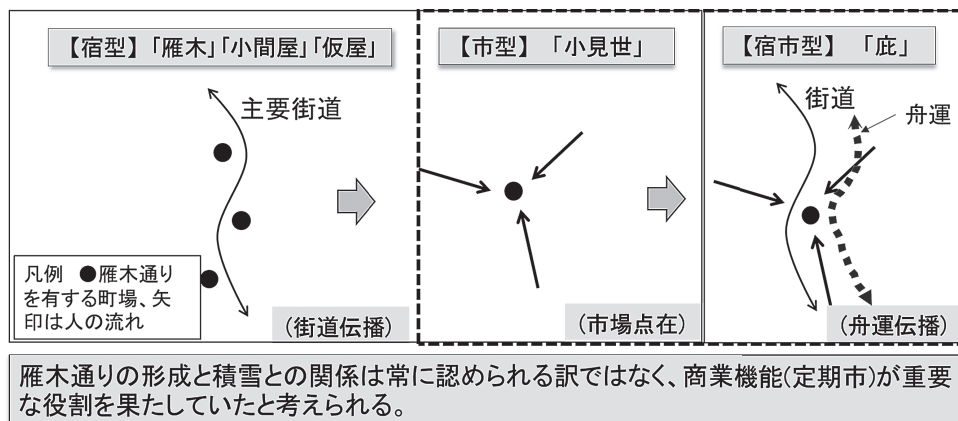


図6 雁木通り形成の模式（3タイプ）

7.2. 上記類型の発生した要因（雁木の祖型との関係から）

上記類型が発生した要因を、雁木の祖型との関係からみていく。**宿型**（「雁木」「小間屋」「仮屋」）では、「雁木通り」の建設が確認できる史料上の初見は、寛永19年（1642）の城下町長岡³⁹⁾であり、17世紀前半に遡る農家遺構がないため断定はできないが、拙論「柳田国男・山口貞夫共編『居住習俗語彙』にみる雁木と小見世の用語解説について」⁴⁰⁾において、長岡から魚沼地域に点在する基壇上の、雁木と同型の農家の庇が、「雁木」と呼ばれる、庇の呼称の発端となった可能性を指摘している。その後、高田では、前出の『正徳年間（1711～1715）高田町各町記録』（上越市立高田図書館蔵）に、北国街道(佐渡三道)の牟礼から分岐する松代道沿いの城下町松代では享保13年（1728）の記録⁴¹⁾に、さらに糸魚川（糸魚川市）では、元文元年（1736）の記録に「ひさし」とあるものの、天明4年（1765）の記録に「雁木」の呼称が確認できる⁴²⁾。糸魚川では当初から「雁木」と呼ばれていた訳ではなかった。よって「雁木」という呼称は、長岡から魚沼を中心とした地域で発生し、その後、高田を経由して、街道沿いに松代や糸魚川へ伝播した可能性が考えられる。「小間屋」や「仮屋」も主要街道沿いに建設されているこ

とから⁴³⁾、同様と考えられる。**市型**（「小見世」）は、残される遺構の復原平面に町家前面の幅広の庇が確認でき⁴⁴⁾、定期市での利用が考えられる。**宿市型**（「庇」）は、例えば三条町と街道に沿って連なる田嶋村では、安永5年（1776）の記録によれば、街道沿いに農家が建ち並び、商家に改造される過程で町家前面に庇が設けられていた⁴⁵⁾。

7.3. 宿場と市場の機能から見た雁木通りの形成

雁木通りの呼称別に、宿場と市場の機能ならびに雁木の祖型との関係を整理すると、以下の3つに分けられる。

- ①「雁木」・「小間屋」・「仮屋」→宿駅機能が強く働いた地域に形成→農家の庇を祖型
- ②「小見世」→市場機能が強く働いた地域に形成→町家の庇を祖型
- ③「庇」→宿と市の両方が強く働いた地域に形成→農家を商家に改造し庇をつける。

以上、宿場と市場は、近世の町場における重要な都市機能であるが、地域によって働きに強弱があり、雁木通りの形成に大きな影響を与えていたものと考えられる。

8. おわりに

安田初雄「高田市の景観」においては、雁木通りの形成と積雪との関係に疑義を唱えており、その後の研究が積雪との関係を無批判に受け入れてしまっている点からも興味深く、特に上越地方における街道沿いの卓越した分布や、中・下越地方における積雪との関係の疑義について指摘した。

雁木通りが形成された代表的な城下町を事例に、その建設整備過程を全国的な視野で見ると、雁木通りは防雪を目的に形成され、その後商業機能拡大に利用された。そのため雁木通りの形成と積雪との関係は、常に認められる訳ではなく、商業機能が重要な役割を果たしていた。これは呼称別の雁木通りの形成や分布に影響を与え、分布地域の性格が強く働いた結果と考えられる。

注

- 1) 雁木・小見世については、菅原邦生・波多野純：近世における雁木通りの建設整備過程，日本建築学会計画系論文集，第494号，pp.221-228，1997. 4 小間屋(米沢)については，菅原邦生：近世における雁木通りの権利形態と利用実態，日本建築学会計画系論文集，第559号，pp.249-253，2002. 9を参照。米沢以外の小間屋については，寒河江市白岩に所在した渡辺家の『慶応三年家普請中大工日雇并金子相渡帳』（山形市史編纂委員会編：山形市史資料 第59号，山形市，p.33，1980所収）に確認できる。また山形城下（十日町）星野家の文政11年（1828）『万歳帳』（前掲「山形市史資料 第59号」所収）では小間屋は「小前」と呼ばれている。他は菅原邦生：近世における雁木通りの分布と形態，日本雪工学会論文集 Vol.37 No. 2 pp.13-28，2021. 4
- 2) 波多野純：「江戸の町家」日本名城集成江戸城，小学館，pp.158-186，1986 玉井哲雄：江戸失われた都市空間を読む，平凡社，pp.78-105，1986
- 3) 安田初雄：「高田市の景観」地理学評論 第15巻 第7号，pp.509-523，1939
- 4) 氏家武：雁木通りの地理学的研究，古今書院，p.11，1998

氏家は安田が大槻文彦『大言海』（富山房、1927）のがんぎの項目に、「町屋ノ軒ヨリ、庇ヲ長ク張出シテ、雪ノ時ナド、其下ヲ通路トスベク作り設ケタルヲ、雁木造りト云フ」を参考した点を確認している。

5) 今和次郎: 日本の民家, 岩波書店, pp.205-206, 1989

6) 東京大学工学部建築史研究室編: 越後高田の雁木, 新潟県上越市教育委員会, pp.4-21, 1982

7) 注4) 前掲, pp.480-481

8) 渡邊英明: 越後平野の市町の中心性と市場景観－雁木通りに注目して－, 人文地理, 55-2, pp.65-79, 2003.4

9) 注4) 前掲, pp.232-236

10) 長岡市編: 長岡市史 通史編 上巻, 長岡市, 1996

11) 注1) 前掲「近世における雁木通りの建設整備過程」

当該論文において用いた史料は、『八町家の記録』（『温古之栞 二二篇』, 長岡市史, 長岡市役所, pp.26-27, 1931）である。同史料には「雪中のため家の内に欠込て雁木通りを申付候」とある。尚、記録の冒頭には、「長岡の御城たち、町の地わり相成候までは」とあり、元和3年（1617）の築城から元和8年（1622）の町割以前の様相を示していると考えられる。

12) 鳥取県編: 鳥取県史 第3巻 近世 政治, 鳥取県, p.30, 1979他

13) 木内信蔵ほか編: 集落地理講座 第4巻, 朝倉書店, p.334, 1959

14) 注1) 前掲「近世における雁木通りの建設整備過程」 財団法人北方文化博物館蔵。『元文四未年九月 月番覚書』（『市史双書 N0.19 長岡藩政史料集(3) 長岡町奉行月番日記』長岡市, 1991所収）。同史料には「裏四ノ町ヨリ表町へ之新小路, 南北江之通り, 十月より三月迄かんき（雁木）掛度旨, 万左衛門申達候ニ付, 障りも無之哉与申儀相尋候得ハ、何之障りも無御座段申達候付, 勝手次第与申付候」とある。すなわち南北への通りと、裏四ノ町より表町への新小路に、冬期に「かんき」を建設したいという万左衛門の願いについて、町奉行が用番老中に訪ねたところ、支障がないとのことから、希望通りに建設してよいとの許可を出している。南北への通りとは裏町を指すことから、長岡の裏町においては、元文4年（1739）に雁木通りが建設された。また「万左衛門」とは町役人の小林万左衛門であることから、町人主導で雁木通りが建設された。

15) 高田市史編集委員会編: 高田市史 第一巻, 高田市役所, 1958

16) 上越市立高田図書館蔵 本記録に記載された下紺屋町における雁木の建設について朝倉（朝倉有子: 「都市景観」から地域と歴史を見る「地域から考える総合学習」, 北越出版, pp.130-145, 2003）は、記録の冒頭に記載された名主名を手がかりに頁を整理し、雁木の記事は下紺屋町でなく善光寺町の記事であり、善光寺町裏の武家地に繋がる小路に雁木通りが建設されたと指摘している。しかし名主名は他にも一致しない部分もあり、検討の余地がある。

17) 注15) 前掲。『高田市史 第一巻』には、「高田町幅の狭きは慶長年中福島城を移築の際、町家造りし頃、雁木と云なく、雪中歩行不自由に依て、後片庇を卸したる故、町幅狭申云伝有り」とある。

18) 八戸市史編さん委員会編: 八戸市史 通史編, 八戸市, 1976 前田利見: 八戸藩史料 全, 八戸郷友会, 1929 高島成侑・三浦忠司: 南部八戸の城下町, 伊吉書院, 1983

19) 『雑書』（八戸市史 史料編 近世2, 八戸市, p.291, 1970所収）

金田一村助蔵七兵衛と申者、去八日之市へ参、怪敷様子にて、小見せ、店所々あるき申ニ付

20) 注18) 前掲『南部八戸の城下町』 p.246

21) 『津軽歴代記類 卷之一』（みちのく双書 第七集 津軽歴代記類 上巻, 青森県文化財保護協会, 1959所収）

22) 注1) 前掲「近世における雁木通りの建設整備過程」『御新検御竿奉行勤方覚書』（青森縣史(二), 歴史図書社, 1971所収）

町屋敷、地子屋敷、寺屋敷、除地屋敷之事

四壁引不可致、尤表裏行尺寸迄可書記之、表の間尺寸改の通り不崩様に野帳に可書出、勿論小見世可除捨之事

但、小店屋敷の内と見候はゞ、不可除捨事

- 23) 弘前市史編纂委員会編:弘前市史 藩政編, 弘前市, p.395, 1963
- 24) 注1)前掲「近世における雁木通りの建設整備過程」『要記秘鑑 廿三 上 町年寄之部』(津軽近世史料1 弘前城下史料 上, 北方新社, 1986所収)。「弘前町々の者共, 近年殊之外不作法罷成, 雨雪暑気等之節ハ, 諸士曆(歴)々も見世下罷通候之处, 右町人とも, 見世の上ニ而きせる楊枝等をくはひ頭巾をかむり立懸, 腰を懸罷有候者共多有之」とある。この記録では, 「雨雪暑気等之節ハ」と, 武士の往来を天候が悪化した時に限定していることから, 「見世下」は, 雁木下と考えられる。よって雁木通りの通路機能を確認できる。
- 25) 糸魚川市役所編:糸魚川市史2, 糸魚川市役所, 1977
- 26) 注1)前掲「近世における雁木通りの建設整備過程」「ひさし」の記述は『町年寄御用留帳』小林家蔵(糸魚川市役所編:糸魚川市史4, 糸魚川市役所, pp.476-477, 1979)に一部所収。同記録の「ひさし」は, 寛保2年(1742)に, 大町の鍛冶屋が, 鍛冶場の雁木下に積んで置いた炭に誤って飛び火させ, 出火したものの, 近所の人が駆けつけ, 消火したものとされることから(『糸魚川市史4』), 雁木と考えられる。
- 27) 桑原孝:近世における雪と交通 一越後の街道を手掛りに一, 交通史研究 第37号, 交通史研究会, pp.1-21, 1996. 8
- 28) 注18)前掲『南部八戸の城下町』p.265
- 29) 注1)前掲「近世における雁木通りの分布と形態」
- 30) 鈴木牧之(岡田武松校訂):北越雪譜, 岩波書店, p.188, 1936
- 31)~33) 菅原邦生: 近世の城下町以外の町場における雁木通りの建設整備過程, 日本建築学会計画系論文集 582号, pp.133-137, 2004. 8
- 34) 注4)前掲, p.476の図134, pp.480-481
- 35).36) 注31)前掲
- 37) 大場修・石川祐一: 近世在方集落における町家形成(前編): 常設店舗の成立と町場の創出, 日本建築学会計画系論文集 510号 pp. 229-234, 1998. 8
- 38) 注8)前掲
- 39) 注1)前掲「近世における雁木通りの建設整備過程」
- 40) 菅原邦生・柳田国男・山口貞夫共編『居住習俗語彙』にみる雁木と小見世の用語解説について, 日本建築学会技術報告集 第72号, pp. 1071-1075, 2023. 6
- 41) 注1)前掲「近世における雁木通りの分布と形態」
- 42) 注1)前掲「近世における雁木通りの建設整備過程」
- 43) 城下町内においても「小間屋」「仮屋」は, 「雁木」同様, 宿駅機能を基盤に成立した町を中心に建設されている。
菅原邦生: 城下町における雁木通りの建設地域, 日本建築学会計画系論文集585号, pp.149-153, 2004.11
- 44) 秋田県羽後町西馬音内の黒沢家(慶応2年・1866再建の平面復元図による) 秋田県教育委員会: 秋田県の民家 = 秋田県文化財調査報告書 第二七集 =, p.127, 1973
- 45) 注31)前掲

※本論は, 菅原邦生: 安田初雄「高田市の景観」にみる「雁木造り」の解説について, 日本建築学会北陸支部研究報告集 第66号, pp.443-446, 2023. 7 同: 雁木通りの歴史的経緯から見た深雪以外の形成要因, 日本建築学会北陸支部研究報告集 第66号, pp.447-450, 2023. 7 同: 氏家武著『雁木通りの地理学的研究』にみる雁木通りの形成要因の再検討, 2023年度日本建築学会大会学術講演梗概集, pp.881-882, 2023. 9で口頭発表したものなどに, 新たな論点を加えて加筆・修正し, 再構成したものである。